



注) この資料は、小学国語読本（昭和13年文部省発行）の一部を複製したものであり、
「稲むらの火の館」（和歌山県広川町）にも所蔵・展示されています。

第十 稻むらの火

「これはたゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛ごへゑは家から出て來た。今の地震は、別に烈しいといふ程のものではなかつた。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したこと

ない無氣味なものであつた。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度に心を取られて、さつきの地震には一向氣がつかないものやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、忽ちそこに吸附けられてしまつた。風とは反對に波が沖へくくと動いて、見るく海岸には、廣い砂原や黒い岩底が現れて來た。

「大變だ。津波^{つなみ}がやつて來るに違ひない。」と、五兵衛

は思つた。此のまゝにしておいたら、四百の命が、村もろ共一のみによられてしまふ。もう一刻も猶豫は出来ない。

「よし。」

と叫んで、家にかけて込んだ五兵衛は、大きな松明たいまつを持つて飛出して來た。そこには、取入れるばかりになつてゐるたくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」

と、五兵衛はいきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつと上つた。一つ

薄 沒



又一つ、五兵衛は夢中^{むちゆう}で走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つた

まゝ、沖の方を眺めてゐた。

日はすでに沒して、あたりがだんく薄暗くなつて來た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、此の火を見て早鐘^{はやかね}をつき出した。

「火事だ。莊屋^{しやうや}さんの家だ。」

と、村の若い者は急いで山手へかけ出した。續いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高臺から見下してゐる五兵衛の目には、それが蟻ありの歩みのやうに、もどかしく思はれた。やつと二十人程の若者が、かけ上つて來た。彼等は、すぐ火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大聲に言つた。

「うつちやつておけ。——大變だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中的人是、追々集つて來た。五兵衛は、後から後

から上つて来る老幼男女を一人々々數へた。集つて来た人々はもえてゐる稻むらと五兵衛の顔とを、代る／＼見くらべた。

其の時、五兵衛はカーぱいの聲で叫んだ。

「見る。やつて来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見る／＼太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押寄せて来た。

「津波だ。」

と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと、山がのしかゝつて來たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとゞろきを以て、陸にぶつかつた。人々は、我を忘れて後へ飛びのいた。

雲のやうに山手へ突進して來た水煙の外は、一時何物も見えなかつた。

人々は、自分等



の村の上を荒狂つて通る白い恐しい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。

高臺ではしばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波に急ぐり取られてあとかたもなくなつた村を、たゞあきれて見下してゐた。

稻むらの火は、風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は、此の火によつて救はれたのだと氣がつくと、無言のまゝ、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。